

姫葉は、いつもと変わらない様子を装いながら、こがねを勇気づけるものの、やっぱりかすかに声が震えてしまう。

しかし、その一方で、こがねの亀頭で内膜をこすりたてられるたびに、無意識のうちに腰が落ち着きなく揺れてしまう。

それに気づき、姫葉は唇を噛みしめて眉根をひそめた。

（ああ。わたくししたら、どうしてしまったの……）

処女膜を失う怖さもあるが、今まで知らなかった自分がどんどんと剥きだしになっていくのも同じくらい怖い。

やがて、ついに突破口を見つけた亀頭が、姫葉のなかへとめりこみはじめた。

「つく、つぶ。あ、ああ……」

強烈な拡張感と痛みとが姫葉を襲い、息がつまってしまう。

（さ、裂けてしまい、そう）

灼熱の棒が、じりじりと体内をうがってゆく。

閉じた目の裏が真っ赤に染まる。

たまらず、「抜いて」と叫びたくなる。

が、彼女はこがねのすべてを受け入れようと、拳を握りしめて懸命に耐える。

「ひ、姫葉、お姉様。き、きつい。ああっは、はあ……。ち、力を、抜いて」



いくら指でほぐれているとはいえ、直径五センチはあろうという肉棒にとってお姉様のなかは狭すぎる。

ちよつと力を抜けば、たちまちペニスは抜けでてしまうだろう。

「こ、こがねっ、ち、力を抜くと言ったって、どうしたらいいのかっ。お願い。い、一気に貫いてっ！」

どうしたらよいのかわからなくなり、半ば錯乱した姫葉がそう叫ぶと、こがねの背中に手をまわして力いっぱい抱きしめた。こがねの背中に、彼女の爪が食いこむ。

「つくうつ、つつ、わ、わかったっ！」

お姉様が痛そうなので、恐るおそるとしか腰を進められなかったこがねだが、意を決して全体重をかけて彼女を貫いた。

途端、抵抗を感じていた引っかかりを亀頭が突破し、肉棒が姫葉のなかへ深々と突き刺さる。

「あっ、ああああああっ！」

ついに奥まで征服された姫葉は、その白い喉をめいっばいのけぞらすと、全身を硬直させた。

身体がばらばらになりそうな痛さを覚え、姫葉の目じりに涙がにじむ。

「つく、はあはあ……。姫葉お姉様、だ、大丈夫？」

姫葉の目の端に浮かんだ涙をぬぐってやると、こがねが心配そうにお姉様の顔を覗きこんだ。

姫葉は、はあはあと荒い息を繰り返しながら、かろうじてうなずいてみせる。そして、痛みをこらえながら気丈に微笑んでつぶやいた。

「ああ、こがねっ。ようやく一つになりましたのね」

胸がいっぱいになり、痛みによるものではない涙がとめどなく溢れてくる。

二人は互いに見つめ合うと、やさしく唇を重ねた。

そして、こがねが姫葉の耳もとにささやく。

「姫葉お姉様、動く、よ?」

誰に教えられるでもなく、こがねは自分がどうすべきか、本能的に知っていた。

姫葉がうなずくと、ゆっくりと腰を動かしはじめた。

（うあっ。き、気持ちよすぎるっ）

姫葉のなかは、しっぽりと熱くぬめっていた。腰を動かすと、奥にあるいそぎんちやくのような突起がひどくざわついて、こがねの肉刀身にからみついてくる。

すぐに精をやってしまったいそうになるが、こがねは必死でその衝動をこらえて、腰を動かしつつける。

「あっ、あ、ああ。こ、こがねが、う、動いてる……」